

## 開学三十周年記念号に寄せて

学 長 村 田 稔 雄

「横浜商大論集」がここに第三十巻を数えることができたのは、まことに慶賀の至りである。この間における大学の歩みを回顧すると、最初の十年間は、大学としての基盤の確立と大学紛争に伴う改革の時代を反映して、大学論や教育論に関心が寄せられた時代であった。次の十年間は、商学科、貿易・観光学科、経営情報学科の三学科体制の下で、論集執筆者の顔触れも内容も多彩となり、北京第二外国語学院の客員教授の論文が加わって、本学における学術研究の国際化が始まった時代であった。開学三十周年を迎えた現在、本学が置かれているのは、新カリキュラムによる大学改革の時代であり、経済的にも学術的にも国際化がさらに進展する時代である。

これまで研究者の評価においては、研究業績が重視されていたが、大学の大衆化に対応す

る大学改革の具体化によって教育の重視が要請され、授業に対する学生の評価も行われるようになった。だからといって、研究を軽視してよいということにはならない。教育と研究が大学の使命であることに変わりはなく、両者のあるべき均衡の実現が求められている。

外国の論文を見て痛切に感じるのは、後発の研究者が先達に追いついてくるスピードの早さと、論文における引用文献や参考文献リストの豊富さである。現在我々が置かれているのは、このような情報のスピード化と国際化がインターネットによってさらに急速に進展していく環境である。開学三十周年記念号を機に、これまでの情報収集方法も研究成果の発表方法も再検討すべきであろう。最近本学の教員が、国際的学会や国際会議の場で大いに活躍していて、まことに頼もしい。そのような活躍の成果がこの論集にも反映して、『横浜商大論集』の声価を一層高めるものと確信している。

平成八年三月